

ふくいじょうあと やまさとぐちごもんちてん  
7. 福井城跡 (山里口御門地点)

所在地：福井市大手3丁目

調査原因：山里口御門復元整備事業

調査期間：平成27年4月1日～8月31日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：160 m<sup>2</sup>

時代：近世



位置図 (S=1/50,000)

**調査の概要** 山里口御門は福井県庁が立地する福井城本丸跡の北西部に位置します。この門は本丸と山里曲輪を結ぶ桁形をした門で、絵図などによると「埋御門」「天守台下門」などとも呼ばれていたようです。

山里口御門の復元整備にあたり、門に隣接する南北の石垣の解体・修復を行うことになり、石垣の現状や解体する石垣の裏込めなどの記録保存を目的に発掘調査を行いました。

**遺構** 石垣は通路をはさんで北側と南側にあります。北側の石垣は、天守台の土台と櫓台の2つから成ります。天守台の土台の石垣は最大12段、櫓台の石垣は最大12段を解体しました。

天守台の土台の石垣の裏込めは、上方に川原石、下方に笏谷石(角礫)を用いていました。川原石は石垣を積み直した際のもので、また櫓台の石垣の下方にのみ、火災にあった痕跡が残っていました。このことから、櫓台上方の石垣は積み直されていることがわかりました。

南側の石垣は最大19段を解体しました。石垣の裏込めは部分的に川原石を用いており、石垣は積み直されています。しかし積み直した範囲は、はっきりしませんでした。

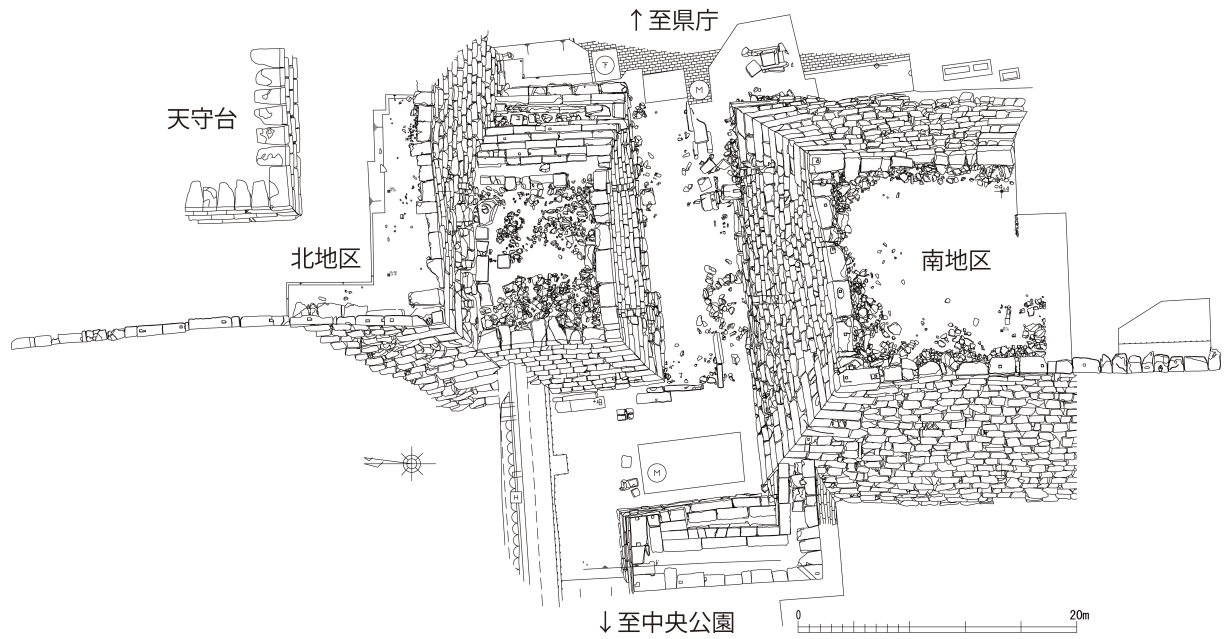
**遺物** 遺物は、石垣の裏込めと盛土から出土しました。大半は瓦で、石瓦と粘土瓦があり、粘土瓦には、いぶし瓦と赤瓦があります。陶磁器も出土しています。陶磁器と瓦は17～19世紀のものがほとんどです。

裏込めから石塔の一部も見つかりました。福井城でも石垣を作る際に石塔が再利用されていたことがわかりました。また珍しいものとして、福井城の石垣上の土塀に使われていた腰板が見つかりました。

**まとめ** 山里口御門周辺の石垣は、慶長6年(1601)からの福井城築城の際に築造され、寛文9年(1669)の寛文の大火によって傷んだため、改修されたことが文献記録に残されています。

今回の調査では、裏込めに使われている石の違いや、石垣の石に残された加工痕や被熱痕などから、石垣が改修されたことが明らかになりました。文献記録に残る石垣の改修された例が、調査によって事実であると証明されたことは大きな成果です。

(中島啓太)



第 1 図 調査区全体図



写真 1 調査区全景



写真 2 北側石垣



写真 3 南側石垣



写真 4 石垣（隅部）根石出土状況